

筑波大学総合技術研究会 2025(口頭発表)

「ポストコロナ社会におけるメタバース語学留学の可能性と実践、そして発展」

山田 知沙^{A)}, 森 啓年^{B)}, 加来 真理子^{C)}, 三上 真人^{B)}

山口大学総合技術部技術企画課^{A)}, 山口大学大学院創成科学研究科^{B)}, 山口大学工学部^{C)}

1 はじめに

2025 年 3 月 5 日から 7 日にかけて、筑波大学筑波キャンパスにおいて開催された総合技術研究会 2025 で口頭発表を行った。

2 口頭発表内容

3 月 7 日(金)

発表分野: (P_09) 実験・実習・社会貢献技術分野

ポストコロナ社会において新しい語学学習の形態として注目されるメタバース語学留学の可能性について考察し、その実践事例と今後の発展について議論した。従来の対面型語学留学と比較し、メタバースを活用することで得られるメリットや課題について検討し、教育分野への応用の可能性を示した。

主な発表内容として、ポストコロナ社会の語学学習の課題とメタバースの可能性、メタバース語学留学の実践事例及びメタバース語学留学の利点と課題について挙げた。まず、ポストコロナ社会の語学学習の課題とメタバースの可能性については、新型コロナウイルスの影響により、海外留学の機会が制限されたことで、オンライン学習が急速に普及したが、従来のオンライン語学学習では、実際の留学と比較して臨場感の欠如やモチベーション維持の難しさといった課題があったことに言及した。これを解決するにあたり、メタバース技術を活用することで、没入感のある学習環境



図 1. 発表の様子

を提供し、異文化交流や実践的な語学学習の機会を創出できることを述べた。次に、これまでのメタバース語学留学の実践事例について紹介した。これにより、アバターを活用することで、学習者の心理的ハードルが下がり、より積極的に発話できること、多国籍の学習者が集まる環境において、異文化理解の促進が期待できることについて述べた。最後に、メタバース語学留学の実践事例について述べた。利点については、時間・場所の制約を超えた学習機会の提供できること、学習の継続性が期待でき、現地留学のような一時的なものではなく、継続的な学習が可能となることが見込めること、さらに、様々な理由で現地留学が困難な人にも学習機会を提供できる多様なアクセシビリティが期待できることを挙げた。一方、課題については、VR 機器の購入やインターネット環境の技術的な制約があること、生活習慣や非言語コミュニケーション等の文化的要素の再現性は現地での体験に比べて難しいこと、今後、対面型と比較した際の効果測定の必要性を挙げた。

発表の機会を得ることにより、今後の展望がより明確になった。具体的には、発表の機会を得ることにより、今後の展望がより明確になった。具体的には、メタバースを活用した語学学習について、今後さらなる実証研究を進め、学習効果をより明確にしていく必要がある。また、メタバース語学学習を実践している教育機関や、技術を提供して

いる開発者と連携し、より高い教育効果を得られる学習環境の構築を目指す。さらに、現地留学の事前学習および事後学習と組み合わせた学習モデルを検討することで、学生の学習成果を最大化していく方針である。

3 おわりに

本研究会への参加を通じ、技術職員としての専門性向上とキャリアパスについて深く考える機会を得た。特別講演では、先端技術の応用や学際的なアプローチの重要性を学び、今後の業務にも広い視野を持って取り組む必要性を実感した。また、他大学の技術職員との意見交換を通じて、異なる環境での課題や解決策を知ることができ、今後の業務に活かす機会を得た。本研究会で得た知見や人的ネットワークを活かし、技術の発展と社会実装を視野に入れながら、より実践的な課題解決に取り組んでいきたい。